

※答えは、別紙の解答らんに書き入れなさい。

「、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。」

いよいよ中学の入学式の日が来た。薄曇りの肌寒い朝だった。伯父さんが帰ってこないならば、入学式は一人で行かなければならぬと覚悟していたのに、実際、他の誰もそのことについて言及していなかったのに、いざ当日になってみると、女性陣たちは皆大騒ぎで準備に取り掛かっていた。

「朋子を一人で行かせたりはしません」

と、いつになくきりっとした様子で伯母さんは言った。

ローザおばあさん、米田さん、ミーナの三人が伯母さんのクローゼットの前に集まり、それぞれ一番いいと思う洋服を手にとって、かわるがわる伯母さんの身体に当てていた。

「ちょっと襟ぐりのあたりがくたびれて見えますわねえ。奥様、また痩せたんじゃないませんか」

「いくらなんでもこれ、寂しすぎる。寂しい気持ち、嫌ね。お祝いの日だから。もっと明るい色の、大きな柄の、ないの？私の貸してあげたいけど、サイズ、無理ある」
「でも、あんまり派手すぎると、子供の方は迷惑なんよね。派手さよりか、若々しさを前面に出したらどう？」

三人の趣味はばらばらなので、着て行く洋服一枚を決めるのも大変だった。肝心の伯母さんは自分の意見を差し挟もうとせず、ただ皆の提案にうなずくばかりだった。

クローゼットの風景からして、伯母さんがお洒落や外出に縁遠いのは明らかだった。そこに掛かっている洋服はどれも、質は上等そうだが、デザインは正統的で、主張がなく、目立たないでいることを主眼に作られたものばかりだった。そのうえ数も乏しく、ハンガーの隙間からクローゼットの背板がのぞいて見えていた。

結局、揉めた末、紺色のシルクシフォンのワンピースに、ミンクのショールを

立って田舎くさいというわけではなかった。母の一番の心配はそこにあったのだが、米田さんの言うとおり、恐れる必要はなさそうだった。更にはぼつとしないのは男子の方で、一目で格好いいと思えるような子は、残念ながら見当たらなかった。担任は大学を出たばかりの、背の低い社会科教師だった。

「(1)」

式が始まる前、隣に座った子が話し掛けてきた。私は住所を言った。

「ふうん。そんなら、カバがいる家の近く？」

「うん。そこ」

「(2)」

彼女はまるで、私がカバそのものであるかのような興味津々の目でこちらを見た。

「(3)」

その子は私の名札を指差した。面倒なことになるそうだと私は思った。その時、教頭先生が厳かに式の始まりを告げ、体育館は静かになった。私はほっとしながらも、その子の耳元に顔を寄せ、

「(4)」

とささやくのを忘れなかった。

入学式の間、伯母さんは完璧に振る舞った。ショールを元どおり肩に引き上げ、その合わせ目に左手を添え、髪留めのサファイアを品よく光らせていた。それらの上に舞い落ちた桜の花びらが、予期せぬアクセントになった。口元には微笑をたたえ、目元にはわずかの翳りもなく、素っ気ないパイプ椅子に座っているにもかかわらず、優雅な姿勢を保っていた。明るい色の口紅はよく似合っていたし、柔らかな生地のワンピースは a 身体の線をより魅力的に見せていた。

申し訳なさそうに煙草に火を点けたり、うなだれるようにしてウイスキーのグラスを口に運ぶ時のあの雰囲気は、どこかに上手く隠れていた。

羽織って多少の派手さを加味しつつ、痩せた首元を隠し、サファイアの髪留めで髪をアップに結って、若々しさを打ち出すことになった。ショールもサファイアの髪留めも、ローザおばあさんが自分の部屋の地層から引っ張り出してきた。口紅を明るい色に塗り直したのも、頬紅を更に重ね付けしたのも、ローザおばあさんだった。

伯母さんに比べ、主役の私の方は簡単なものだった。西宮の洋品店から届いたばかりの制服を着て、白い靴下を履くだけだった。伯父さんが見立ててくれたおかげで、制服はぴったりと身体になじんだ。校則で禁じられているので、ミーナやポチ子のようにリボンを結ぶわけにもいかなかった。

「よろしいですか、朋子さん。堂々としていたらいんです。最初が肝心です。転校生だからと言って、びくびくしてたらいけません。所詮皆、新一年生なんです。なんにも恐れることはありません」

米田さんはそう言って、私の背中をポンと叩いた。私は米田さんが心配するほど何かを恐れてもいなかったのだが、ありがたくなすいた。

ミーナはいつものとおり、ポチ子に乗って小学校へ、私は伯母さんと二人、もちろん徒歩で中学校へ出発した。小学校と中学校は正反対の方向にあった。

Y中学校は家よりも更に海拔の高い場所にあった。通学路は坂道などという生半可なものではなく、ほとんど登山をしているのと同じだった。高座川のせせらぎが、木立の間から聞こえていた。伯母さんも私も息が切れ、いつしかうっすら汗ばむほどになり、せっかくの伯母さんのショールは半ばずり落ちそうになっていた。

中学は想像していたよりもどかな風景の中にあり、都会的な雰囲気はなかった。校舎の真後ろに山が迫り、そこより上には住宅の気配はなく、ただ木々が生い茂っているばかりだった。これならば、田んぼの真ん中にある岡山の中学とそう変わらない感じだった。

私は一年二組になった。クラスの女の子たちを見回したところ、私だけが目

お互いの学校が始まると、ミーナと私の生活にもリズムが出てきた。学校から帰ると、おやつを食べ、勉強をする。夕方にはマーシャ・クラツカワ先生のラジオ講座『基礎英語』を聴き、米田さんか小林さんのお手伝いをする。人參の皮をむいたり、ポチ子の餌を運んだり、簡単な仕事ばかりだ。ミーナが必ずするお手伝いは、マッチでお風呂のガスの火を点けることだった。私がやって来るずっと以前から、それは彼女の仕事と決まっていたようだった。晩ご飯を食べた後はミーナと一緒に風呂に入り、それぞれのベッドで眠りに落ちる。

毎日が規則的になるにつれ、私のホームシックは治まるうとしていた。朝はたいいてい上機嫌だった。特に天気の良い春らしい朝、カーテンを通して差し込んでくる朝日で目を覚ます瞬間が好きだった。昨夜脱いだままの室内履き、鮎色の床、壁紙の地模様、ランプ型の電灯、その前に座るだけで賢くなれそうな、b 机、そうしたものたちがうす暗がりの中で少しずつ浮かび上がってくるのを、ベッドから眺めるのが好きだった。

カーテンを開けると、庭の緑が朝露に濡れて光り、遠く空との境目に、海が横たわっているのが見える。ポチ子は築山の寝床でまだ夢を見ているのだろう。ただ小鳥たちだけが元気にさえずり、池のほとりで水を飲んでいる。階下からは朝ご飯の支度をする米田さんの気配が伝わってくる。毎朝バゲットパンを配達してくれる、ベーカリーBのライトパンが勝手口の前に止まる音も聞こえる。その音を聞いただけで、焼きたてのパンのいい匂いが漂ってくる気がする。朝日は世の中を平等に祝福しているように見える。

ところが、夜は危ない。日が沈み、玄関ポーチ、台所、踊り場、庭園灯と家のあちろちろの明かりが順番にとりだし、暗闇が足元から迫ってくる時分になると、祝福は呪いに変わる。ミーナだってローザおばあさんだって皆、本来あるべき自分の居場所に守られているのに、私だけが c ところに置き去りにされている気分になる。闇は世の中からたった一人、私だけを選び出して心の中へなだれ込んでくる。

特に夜のポチ子がいけない。夜行性のポチ子は、暗くなると昼間より行動範囲

が広がり、花壇の周りを回ったり、藤棚の下にあるベンチに頭を載せて夜景を眺めたり、芝生に寝転がったりする。小林さんの用意した餌だけでは物足りないのか、茂みや植え込みに頭を突っ込んで始終口をもごもごさせる。時々、池に入り、d 身体からは想像もできない静けさで水面を泳ぐ。

そんなポチ子を部屋の窓から眺めていると、なぜか寂しくてたまらなくなる。昼間にはただ滑稽で心む仕草にしか見えなかったものが、暗くなった途端、もつと別の意味を帯びてくる。私たちに打ち明けられない悲しみを、ポチ子はあえてヨチヨチと庭を歩きながら、吐息と一緒に吐き出しているに違いない。あるいは池の水に溶かし出そうとしているのかもしれない。小林さんが帰った後で。誰にも気づかれないよう、暗闇に紛れて、ひっそりと。

⑧ 家中で私一人が、夜のポチ子をこんなにも心配している。彼女の本心を分かっ

ているのは、私しかいないように思えてくる。暗がりの中に浮かび上がる、深緑

色のポチ子のお尻に、私と彼女の寂しさが一緒になって、びっしりと詰まっている。

ホームシックを慰めてくれる一番の薬は、母からの手紙だった。米田さんは郵便受けに母の手紙を見つけると、何を差し置いてもすぐに大きな声で私を呼んだ。

「朋子さん。お母様からお便りです」

その声を聞くと皆が一斉に、私の元に集まってきて手紙の到着を喜び合った。

「この前のんより、分厚いんと違う？」

ミーナの観察はいつもどおり鋭い。

「トモコママ、字が上手。もうこの漢字、私は読める。お月様が二つ並んで、

朋子」

ローザおばあさんは老眼鏡を掛けて封筒の宛名をのぞき込む。

「ちゃんと返事を書いていますか？お母様を安心させないけませんよ。親に心配を掛けるのが一番の親不孝です」

どんな時も米田さんはお説教を忘れない。

「皆がそばにいますと、ゆつくり手紙が読めないわ。朋子を一人にしたらげましょ」と、伯母さん言う。

問一 — 部①とありますが、「伯母さん」が「ただ皆の提案にうなずくばかりだった」のはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で

答えなさい。

ア 三人の言うことはどれも正しく、とても自分の意見を差し挟めるような雰囲気ではなかったから。

イ 服を選んでもらっている手前、文句を言うわけにもいかず、首を縦に振ってうなずかなければ申し訳なく思ったから。

ウ 三人ともせっかく自分のために真剣に服を選んでくれているので、誰か一人にだけうなずいてしまうと、三人がケンカしてしまいそうだったから。

エ 伯母さんはもともとお洒落や外出に縁遠かったので、三人の意見はどれも正しく聞こえ、どれにするかはまかせようと思ったから。

問二 — 部②「なんにも恐れることはありません」とありますが、「米田さん」は「私」がどんなことを「恐れる」と考えたのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 転校生として入学する学校で、自分だけが田舎くさいかもしれないということ。

イ 初めて身につける制服が似合わなくて、周りのみんなに笑われるかもしれないということ。

ウ 都会的な学校で、自分なじめないのではないかとということ。

エ 自分に、毎日登山をするようにして通学ができるのだろうかということ。

問三 — 部③「入学式の間、伯母さんは完璧に振る舞った」とありますが、どのように「振る舞った」のですか。普段との違いを明らかにしながら説明しなさい。

⑦ 彼らがどうして人に来た手紙にこれほどの興味を示すのか分かったのは、米田さんが、

「龍一さんからお便りです」

と言つて居間に入ってきた時だった。スイスに留学しているミーナの兄龍一さんからの手紙は、無条件で彼らを幸福にした。山の上の家に、外の世界から吹き込んでくる一陣の風だった。ローザおばあさんはいつになく早いリズムで杖を突いて登場し、伯母さんはすぐさま煙草をもみ消し、庭仕事をしているはずの小林さんまでもが駆けつけてきた。宛名はいつもローザおばあさんになっていたので、封を切る特権は彼女に与えられた。

「ねえ、早く開けてよ」

待ちきれずにミーナは急かしたが、おばあさんは手紙に付随するすべてを味わうように、文字をなぞり、消印を見つめ、糊付けされた合わせ目にキスをした。それからようやくおぼつかない手つきで、ハサミも使わずに封を破った。それほど大事な手紙の封筒がびりびりに破れてしまつて大丈夫なのかと私は心配したが、皆は既に中身のことと頭が一杯らしく、気にしてはいないようだった。

中にはローザおばあさんだけでなく、伯母さん、ミーナ、米田さん、小林さん、それぞれ宛てた手紙が入っている。皆おばあさんの手から、自分の手紙を選び出し、すぐにその場で立ったまま読みはじめる。ある人は含み笑いをし、ある人は感じ入ったようにうなずく。誰かが、自分のにはこんなことが書いてある、と言つて声に出して手紙を読み出すと、まるで競い合うかのように、私にはこんなことが、私のには……と次々朗読がはじまる。各々ソファアのお気に入りの場所に座り、お互いの手紙に耳を澄ませる。

彼らは手紙が届く喜びを大事にする人たちだった。それを分かち合える人たちだった。しかし私は気づいていた。龍一さんからのエメールに、伯父さん宛ての手紙は一枚も入っていなかった、ということに。

(小川洋子『ミーナの行進』より)

* 問題作成の都合上、本文を一部省略した。

問四 — 部④「特に天気の良い瞬間が好きだった」とありますが、「私」は「朝日」をどのようにとらえていますか。そのとらえ方を述べている一文を

抜き出し、最初と最後の三文字を答えなさい(句読点は含まない)。

問五 — 部⑤「暗闇が足元から迫ってくる時分になると、祝福は呪いに変わる」とはどういうことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 日が沈み暗くなってくると、楽しい気持ちですっかり冷め、何も見えない暗さが怖くてたまらない気持ちになる、ということ。

イ 日が沈んで暗くなるとともに空気が冷たくなり、体も冷えて寒くなると心も寒々とした気持ちになる、ということ。

ウ 日が沈み暗くなってくると、朝の上機嫌だった気持ちは沈み、居場所がない孤独感でいっぱいになる、ということ。

エ 日が沈みあたりを闇が支配してしまつと、まるでこの世に呪いがかけられてしまったような気持ちになってしまう、ということ。

問六 — 部⑥とありますが、「彼女の本心を分かっているのは、私しかないように思えてくる」のはなぜですか。五十字でまとめて書きなさい。

問七 — 部⑦「彼らがどうして人に来た手紙にこれほどの興味を示すのか分かった」とありますが、

(a) その答えとして次につながる二十七文字の表現を抜き出して答えなさい(読点を含む)。

手紙が()から。

(b)「人に来た手紙にこれほどの興味を示す」彼らは、手紙に対してどのようなことができる人たちですか。次の空欄に適当な言葉を文章中から探して入れなさい。

彼らは [] を大事にし、
それを [] 人たちだした。

問八 [] a～dに当てはまる適当な修飾語を次から選んで、記号で答えなさい。

- ア 見当違いな
イ ずんぐりとした
ウ ほっそりした
エ どっしりとした

問九 「(1) (4)に当てはまる適当な会話文を次から選んで、記号で答えなさい。

- ア ほんでも、苗字が違う
イ 家、どこなん？
ウ カバじゃないの。コビトカバ。偶蹄目カバ科コビトカバ属
エ へえ

問十 ろ線部A～Dの漢字の読みを書きなさい。

- A 生半可 B 名札 C 生地 D 気配

それにそった行動をとります。それは、たとえば「仏滅や丙午と凶事の間には何らかの関連がある」という非合理的な考えを、自らの行動選択の一つの基準にしていることを示しています。つまり、占いや迷信は科学や合理性とは別のところ

で、「心理的な事実として行動に影響を与えている」のです。
見方をかえると、心理的事実にしたがっているという意味では、こうした行動も一種合理的なものと言えるかもしれません。[エ]、この心理的事実を想定する心の働きが「信じる」ということではないでしょうか。

「信じる」という言葉は、日常生活のさまざまな場面で使われます。

「自分の可能性を信じてみよう」「そんなことを言うなんて信じられない」「合格することを信じています」「愛を信じられなくなった」「なんて信じやすい人なんだろう……」。

これらの表現に共通する意味を辞書的に考えてみると、「信じる」とは「何か(が存在すること)を疑わずに、本当のことと思ひこむ心の働き」であり、言いかえると「あることが事実であると想定する心理状態」をさしているようです。

私たちの生活はさまざまな想定なしには成り立ちません。もちろん信じる程度には「完全に信じている」から「疑わしいが信じてはいる」まで、その強さには違いがあるでしょう。しかし、私たちは格別に意識しなくても日常的にいろいろなことを事実だと想定しています。

たとえば仕事をすれば給料をもらえること、病気になったら医者が治してくれること、電車は「ティジ」に発車すること——などを信じています。また、いちいち確認しなくても、学校で習うことは正しいとか、テレビのスイッチを入れれば番組を見ることができる、といったことも暗黙のうちに事実だと想定しています。

つまり日常生活の多くの局面で、字義通りの「信じる心」が働いているのです。ただ、事実と想定しているといっても、あまりに明らかなことに対して「信じる」という表現は似合いません。ですから、信じるという言葉を使う場合は、信じる対象が不確定であるという意味を帯びて使われます。もしも確実なことであれば、ただ単に「知っている」とか「ある」か「ない」かだけで述べるほうがしっ

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

科学の世紀といわれる現代を生きる私たちも、非合理的な迷信とは完全に無縁になつてはいません。たとえば古い。星座や血液型や手相をもとに人の運命や性格を予測できるという主張は、現代の科学的常識とは相容れないものがあります。しかし、私たちの実生活にこうした古い確信に根づいています。たとえば「私は占いなんか信じてない」と断言する人でも、おみくじを引いて大吉が出ると嬉しく、大凶が出るとがっかりするのではないのでしょうか。また、雑誌をバラバラ見ているうちに、占いのページだけはいついっしょに読んでしまっていないませんか。もちろんごく一般的な意見として「占いを非合理と批判するのはヤボな話だね。気楽な娯楽としておもしろがついているだけで、別に本気で占いを信じているわけじゃないんだよ」という反論もあると思います。たしかに占いを盲信している人は少ないかもしれませんが、[ア]、占いが私たちの具体的な行動に影響を与えている事実は、現実に数多く見ることができます。

たとえば、大安吉日(六曜)が迷信であることは、現代に生きる私たちはよくわきままえてはいるはずですが、ところがいざ結婚式をあげようなどというときには、やはり大安吉日を選ぶ人が圧倒的です。ふだんは科学的に考えることを心がけていても、子供が生まれれば、にわかには姓名判断の本を読みあさる人も多いでしょう。[イ]、丙午の年に生まれた女は夫を食うとか殺すとかいう迷信があつて、この年には出生数が減少することが知られています。丙午は六〇年シユウキで訪れますが、最近の丙午は一九六六(昭和四一)年で、この年の出生数は前年比で二七パーセントも激減しています。興味深いことに、その前の丙午(明治三十九年)での出生数の減少は約一二パーセントでした。[ウ]、科学的な教育が行き届いているはずの現代のほうが、明治時代よりも丙午の出産を避ける人の割合が増えていたということです。

私たちの生活の随所にこうした迷信がまだ自然な形で生きていて、しばしば、くりきます。

たとえば「あなたの愛を信じます」という言い方は、愛情の危機を迎えたときや、再確認が必要などの言葉です。「死後の世界を信じます」というのも、確実でないからこそ「信じる」「信じない」という表現になります。

一方、前述の「テレビのスイッチを入れれば番組を見られる」ことに対しては、ふつうは「信じる」という言葉を使いません。あえて使うなら、それはテレビを修理した後のセリフになります(それも下手な修理の場合でしょう)。

以上のように考えてみると、「信じる」ということは、事実と想定すること、その対象は不確定であること、という特徴をもつことがわかります。

このような何かを信じる心の働きを、心理学用語では「信念(ビリーフ)」と表現します。心理学辞典によれば、信念とは、「ある対象がある特性をもつことについての主観的可能性を述べたもの」と定義されています。

一般的な意味での「信念」には、「堅く信じこんでいる」という語感がありますが、心理学の定義では必ずしも堅く信じている必要はありません。確信していることも、ひよつとしたらと思つている程度のことも、いずれも「信念」の範疇に入ります。つまり、信じることはあくまでも [A] であり、可能性の問題であつて、[B] などではないというわけです。

現実には、私たちは何かを信じたり、信じなかったりという判断を日々くりかえして社会生活を営んでいます。それでは、何かを信じるか信じないか、言いかけると、何が事実か事実でないか、という判断はどう下されるのでしょうか。

1 []
2 []
3 []
きちんとした証拠のないことや科学的に考えればいかにも疑わしいことでも信じてしまう場合がたびたびあるのです。先に述べた六曜の例では、私たちは「大安吉日に行動すればよいことがある」ということを心理的な事実と想定し(もしくは約束事として了解し)、式場を予約したり退院日を決めたりします。

それだけではなく、科学的知識と完全に対立するキョウウコな非合理的信念で行

動し、それが社会問題を引き起こすことも珍しくありません。

「これを買わないとたたりがあつて、不幸な人生を送ることになる」と信じさせる霊感商法がしばしば報道されています。また、超能力や霊能力によって病気が治せると信じた人たちが、巨額の金をだまし取られたり、医療機関の治療を拒否することもよくニュースになっています。

いまも記憶に残るあの事件、教祖の超能力やハルマゲドン予言を信じたカルト教団の信者たちの凶悪な犯罪は、日本の社会に大きな C 跡を残しました。さらに海外でもカルト教団の信者が集団で自殺を遂げる事件がたびたび起こっています。

いずれも、事実ではないことを事実と想定する心が招いた悲劇と言えるでしょう。

信じる心は、私たちの日常になくはならない心であるのと同時に、ときには私たちの合理的な思考をさまたげることもあるのです。その結果、多くの人に不幸をもたらす事件につながる危険があることも忘れてはなりません。だからこそ、そのような非合理的な信念が生まれる心理的なメカニズムのキユウメイが重要になってくるのです。

(菊地聡『超常現象をなぜ信じるのか』より)

* 問題作成の都合上、本文を一部省略した。

[注]

* 1 六曜……よみのうえの迷信で、日の善し悪しが決まるといふ六つの日。大安・仏滅など。

* 2 範疇……同じ種類のものの範囲・部類。

* 3 ハルマゲドン……新約聖書に記されている、世界最終戦争。

* 4 カルト教団……狂信的な信者によって組織されている、小規模な宗教集団。

問五 部⑤について、心理学用語としての「信念(ビリーフ)」と一般的な「信念」との違いの説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア どちらの「信念」にも「堅く信じている」という意味合いがあるが、一般的「信念」では信じている度合いはやや弱くなる。

イ 一般的「信念」は主観的可能性の段階に留まっているが、心理学用語では「堅く信じている」という要素が強く込められている。

ウ 一般的「信念」が完全に信じている状態を示しているのに対し、心理学用語ではむしろ信じていること自体を疑っている。

エ 一般的「信念」には「堅く信じている」という意味合いがあるが、心理学用語では主観的可能性を示している。

問六 文中の ア エに入るべき語句の組み合わせとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| ① | ア | つまり | イ | そして | ウ | しかし | エ | また |
| ② | ア | しかし | イ | そして | ウ | また | エ | つまり |
| ③ | ア | しかし | イ | また | ウ | つまり | エ | そして |
| ④ | ア | また | イ | しかし | ウ | そして | エ | つまり |

問七 文中の ア・Bに入るべき語句として最も適切なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|-----|---|-----|
| A | 客観 | イ | 靈感 | ウ | 語感 | エ | 主観 |
| B | 必要 | イ | 確実 | ウ | 不必要 | エ | 不確実 |

問一 部①「興味深いこと」とありますが、どのようなことが「興味深い」のですか。わかりやすく説明しなさい。

問二 部②「古いや迷信は科学や合理性とは別のところで、心理的な事実として行動に影響を与えているのです」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 科学的根拠がないというのは誤りで、人がどういう行動をとるかという選択の基準になっている以上、そこには根拠の存在を認めるべきだということ。

イ 科学的根拠がないとわかっているにもかかわらず、迷信と出来事との間に関連があるという非合理的考えを行動選択の一つの基準とする場合があるということ。

ウ 科学的根拠がないことは明らかであるが、迷信が現代にいたるまで信じられている以上、それを全く否定することは心理的にも許されないということ。

エ 科学的根拠がないようにみえても、実は迷信と出来事との間には常識を越えた結びつきがあり、人が行動する時には十分にその基準になるということ。

問三 部③「信じる心」とはどのような心の状態のことですか。該当する部分を本文中から十九字で抜き出し、最初と最後の各三文字を記しなさい。

問四 部④「テレビのスイッチを入れれば番組を見られる」ことに対しては、ふつうは「信じる」という言葉を使いません」とありますが、それはなぜですか。六十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問八 文中の Cには身体の一部を表す語(漢字一字)が入ります。入るべき語として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ア | 爪 | イ | 手 | ウ | 背 | エ | 目 | オ | 指 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|

問九 文中の 1・3には、次の各文が入ります。適切に並べ替え、それぞれに当てはまる文を記号で答えなさい。

ア ごくふつうに考えれば、科学的知識や常識に照らして確実性が高い証拠があればそれを信じ、そうしたものと相反する疑わしいものは信じないようにするのが実務的な知恵だといえます。

イ つまり、根拠のないことでも心理的事実として扱われているのです。ウ とろろが、これがしばしば当たり前ではなくなりました。

問十 ア・オの「と」について、オと同じ用法の「と」を ア・エから一つ選び、記号で答えなさい。

問十一 部 a・dのカタカナで表記された語を漢字で正しく書きなさい。

- | | | | | | | | |
|---|------|---|-----|---|------|---|-------|
| a | シユウキ | b | テイジ | c | キョウコ | d | キユウメイ |
|---|------|---|-----|---|------|---|-------|

[illegible][illegible]

合計点数
